

佛蘭西書巡覧 24

平山 弓月

かつて『岩窟王』の名によってわが国に紹介されて以来、この小説ほど広く読まれ、そして絶えず読者を新たにしていた作品は、けだし稀であるといえるだろう。

山内義雄



筆者には悪い癖があり、学年末試験のような大事なことを前にすると、なぜか関係のない物語を読みふけてしまうのです。学年末を迎え、試験に追われるあなたたちには、そんなことにはなっていないでいただきたいのですが、今回お話ししようと思う作品は、もしかすると「危険」な小説かもしれません。取扱いにご注意ください。

そんな「危険」な作品を、それも大量に残した人はアレクサンドル・デュマ・ペール *Alexandre Dumas Père* (1802-1870)で、彼には植民地サント・ドミンゴ生まれの黒人奴隷の血を引きナポレオン軍にあって、「黒い悪魔」との異名を持ち、勇猛さで名を馳せ中將にまで上りつめながらも晩年は不遇であった父を通して、黒人の血が流れています。小説家デュマのナポレオンに対する愛憎は、彼の父に由来しているのかもしれませんが。

19世紀に文学を目指す若者がみんな等しく、詩作や劇作に向かったように、デュマもまずは劇作に手を染め、『アンリ三世とその宮廷』 *Henri III et sa Cour* (1829)で観客の関心を引き、『アントニー』 *Antony* (1831)や『ネールの塔』 *la Tour de Nesle* (1832)で大成功を収めたのです。その後1844年からは小説に転じ、『三銃士』 *les Trois Mousquetaires* (1844)『モンテ・クリスト伯』 *le Comte Monte-Christo* (1841-45)を筆頭とする膨大な物語群を遺したのです。これらは、それぞれ血沸き肉躍るストーリーで、息もつかせぬ展開を見せるのです。

今回次回と二回にわたりお話しする『モンテ・クリスト伯』は壮大な「復讐」劇で、一気に全巻を読み通したくなるのです。『三銃士』はまた別稿でお話ししましょう。

主人公は、地中海を航海する貨物船の一等航海士のエドモン・ダンテスという名の好青年で、航海中に船長が死んでしまい、そのあと無事にマルセイユまで回航してきたのです。その功で船長に昇進することとなりますが、それを妬んだ同僚や、エドモンの婚約者に横恋慕するものの罠にかけられてしまいます。亡くなった船長の遺命によって、ナポレオン一世が流刑に処せられているエルバ島

に寄港し、副官から手紙を託されたのを、退位した皇帝の復権という陰謀に加担したという、いわれなき罪に問われるのです。権力・地位・名声・女性を欲する者たちの悪計に嵌められたのです。

マルセイユ沖の監獄島に閉じ込められたエドモンは、絶望にかられますが、秘密に掘り進んだ通路を通し知遇を得た隣室のファリア司祭から、15世紀にモンテ・クリスト島に隠された、莫大な財宝のありかを教えられたのです。司祭の知恵で、彼の遺体とすり替わり、エドモンは脱獄に成功するのです。

Trois compartiments scindaient le coffre.

Dans le premier brillaient de rutilants écus d'or aux fauves reflets.

Dans le second, des lingots mal polis et rangés en bon ordre, mais qui n'avaient de l'or que le poids et la valeur.

Dans le troisième enfin, à demi plein, Edmond remua à poignée les diamants, les perles, les rubis, qui, escade étincelante, faisaient, en retombant les uns les autres, le bruit de la grêle sur les vitrines.

箱は三つに仕切られていた。第一の仕切りには、鹿の子色の反射をみせて真紅な金貨が輝いていた。第二の仕切りには、磨きのかからない地金が整然と並んでいた。だが、それは、とても重く、すばらしい価値があるということ以外、金のようには見えなかった。さて第三の仕切りには、その半ばを埋めつくして、手に溢れるほどのダイヤモンド、真珠、紅玉があった。それは輝きわたる滝をなしてざらざらこぼれ落ちながら、まるでガラス窓にあたる霰のような音をたてた。

(山内義雄訳)

ここからがエドモン・ダンテスの復讐劇の始まりです。

陰謀をたくらみ、罠をしかけ、エドモン・ダンテスを無実の罪におとした者たちへの復讐に向けて彼は、周到な準備をします。今や成功し上流の生活を謳歌している仇を突き止めながら、イタリアの貴族モンテ・クリスト伯爵と名乗って、持てる財産とあらん限りの知恵を働かせ、復讐という名の航海に乗り出すのです。

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)